



20xx年。日本。人々の生活の中における『美容整形』はますます身近に、そして手頃になり、国民の世代交代が進むにつれ『整形手術』に対する倫理的な抵抗感もますます薄れていた。ファッション雑誌では『流行の色』『流行のアクセサリ』に並んで、『まぶた』の整形はあたりまえ、『流行の鼻』だの『アゴ』だの『エラ』だの『三角筋』だのの特集が組まれていた。一人の人間が、その人生において『整形手術』を2回以上行う事も珍しくなくなっていた。まさに『変装』や『変身』を繰り返していた。中には『猫の耳』や『ラムちゃんの角』を頭部に移植する女性もいた。アニメコスプレ愛好家にも拍車がかかっていた。シッポを移植し「オラ悟空。」と言って、喜んでいた男性がいたが、はっきりいって邪魔だったので三日でシッポは除去された。

当然、化粧道具も進化を続け、若者を中心に大勢の男女がその時代の『流行の顔』に自分の顔を近づけることが可能になっていた。お化粧はもはや『自分を美しく見せる』ためではなく、『自分が誰だか分からなく』するための行為になっていた。ルパン三世も真っ青だ。ほとんど『特殊メイク』であった。ちなみに『銭形警部』が埼玉県警の正式なマスコットキャラクターになっていた。浦和警察署前には全長3メートルの『銭形警部』の銅像が建てられ、世界中のマニアの巡礼の地となった。

ついでに、国際結婚はますます増え、当然その結果産まれる『ハーフ』の子供も増え、見た目だけで『人種や国籍』を判断することはもはや不可能な時代に突入していた。二つの人種の『長所が上手く合わさった』外見の子供が産まれる事もあれば、当然『その逆』もあるので、そんな時はやはり『手術』であった。

親が自分の子供にその時代に合わせた整形手術を受けさせることも珍しくなくなっており、よく似た『整形顔』が並ぶと小学校の入学式の集合写真など、『誰が誰だか』よく分からなかったのが、胸の名札がやけに巨大化していた。その写真を見ると、一発で当時の流行の芸能人を思い出すことができた。そして国民は頭髪の色に関してもますます寛容になり、蛍光色も増え、黒髪の日本人など全人口の1割以下になっていた。さらに植毛・増毛技術も進化して頭髪の薄い人間はもはや『好きでそうしている』人のみになっていた。多くの国民が視覚的なアイデンティティを失っていた。その国民の主導者を目指す選挙立候補者たちも、視覚的に好感度を上げる為に『変身』手術を利用しており、もう『何が何だかさっぱり』という状態であった。選挙ポスター掲示板などにも『似た様な顔』が並ぶ事が、まるでそれは雑誌の『間違い探し』であった。

たいがいの欧米の国々では他人のそれとは違う個性を表す事が尊重されていたのに対し、日本では『みんなと一緒にいること』や『普通である事』が何よりも『優れている人間の条件』だったので、その社会的通念がますますその『アイデンティティ』喪失の状況を悪化させていた。

そして、その『変身技術』は当然、犯罪にも利用されるようになっていた。以前は困難と思われた『前頭部や耳』の変形も簡単に短時間に行われるようになっていた。防犯カメラの映像などは大して役に立たなくなり、警察の犯罪者の追跡を困難にしていた。誤認逮捕、誤認射殺、五人戦隊が後を絶たなかった。○○警察署の署長の『そっくりさん』が犯人と思われた事件では、『そっくりさん』ではなく、署長本人が犯人であった。

そこで事態を重く見た日本政府は、『珍しく』急いで法の整備を開始。相変わらず現場には赴かず、偏屈な『識者』と『出て来た統計記録のみ』を頼りに論議を続けた。国会議事堂の地下には『高級料亭』が24時間営業しており大繁盛であったが、やはり一般市民にとっては『税金ドロボー』意外のなにものでもなかったもので、その存在は闇に包まれていた。従業員には口止め料が支払われていた。税金で。

とりあえず、『美容整形外科にまつわる何やらややこしい特別法案』がまとまり、野党は反発する理由も見つけられず、お腹がすいたので、さっさと可決。

顔面への整形手術は1年に2回までを上限とする。

医師は全患者の整形前、整形後の顔写真の記録を最寄りの警察署に届ける。

前頭部、耳の整形は一部の例外(事故などによる損傷部分の回復等)を除き認めない。

未成年の整形手術は一部の例外(事故などによる損傷部分の回復等)を除き認めない。

指紋の除去、網膜の操作は原則として反則。

皮膚の色素の人為的操作の禁止。

一部の化粧品の未成年への販売はその保護者の承諾を必要とする。

整形手術税の導入。

おやつは500円まで。

などなど。即、施行された。

しかし、金銭的利益の為なら違法行為もなんとも思わない輩はいつの時代もいるもので、金を積めば違法と知りつつも手術を行うという医師がけっこういた。その背景には『整形外科医師』の『増え過ぎ』による『平均収入』の激減があったようだ。ピーク時にはコンビニの数と同じぐらいの『整形外科医』が開業していた。中には『未来の整形外科医』の学生が自分の行った違法手術を『自慢する映像』をネットに流し問題になった。しかし、当の本人は「みんな、やってんじゃん。」と開き直り、反省の色は微塵も見られなかった。司法側も、なんだか面倒くさかったので『極刑を前提とした終身刑』という判決を下し、さっさと帰宅した。

さらに巷では、英語の整形外科を表す『plastic surgery』を省略したと思われる『プ  
ラサー』が若者を中心に流行言葉になったことで状況はますます酷くなっていった。やがて市販  
の化粧品による『変身』も『プラサー』の概念に含まれてしまうようになった。その『プラサー』  
自体を正式な英語の単語だと思っている国民がほとんどであった。何にせよ、いつの時代もワケ  
のわからん『流行言葉』はオブラートのように現実を隠すように包み込み、現実を飲み込み易く  
するのであった。

何にせよ、整形手術、もしくは『変身手術』を行う人間は着実に増え続けた。一部の『  
謙虚な変わり者』を除き、もはや『誰が誰だか』分かんなくなってしまう、日本政府は国民全員  
に『個人情報』を書き込んだICチップを体内に埋め込むことを義務づけた。もともとペット用  
であった個人情報を記録した小型ICチップである。専用の機械(\*この読み取り機は空を飛びま  
せん。)を首筋にかざすだけでICチップの情報が読み取れる仕組みだ。でもって、『個人情報、  
国内消費、サービス残業』は国民の『新三大義務』と揶揄された。

まもなく『ハイテク身分証明証』が登場した。IDカードの『巻き戻し、早送り』ボタン  
を押すだけで、顔面に整形手術を施した者の『これまでの変身の経過』を全て顔写真のところに  
表示できるようになっていた。それに伴い、身分証明証にかかるコストが激増し、国民の不満は  
つのるばかりであったが、政府が人気芸能人、100人を起用したテレビCMを流すと『それが当たり  
前』の状況になり、流行になり、皆すぐに慣れた。

2xxx年。欧米諸国では、日本人渡航者に対し『パスポートの提示』に加え、『体毛のサ  
ンプルの提出』と『一般常識講習の受講(\*非常識な渡航者が「あまりにも」増えたため)』が  
義務づけられた。EUの一部の国々では日本人の持つ『ハイテク身分証明証』が闇で高値で取引さ  
れていて、防犯意識の低い日本人観光客が年がら年中、盗難の被害に遭っていた。

やがて日・米・韓の三国で共同開発した軍事衛星、『エレクトリックアイ』を利用した  
高性能GPS追跡機能が身分証明証にも搭載されたが、『多国籍環境派テロリスト』が極秘に作り  
上げた長距離ミサイルシステム、『ペインキラー』(彼らは環境保護の為、と言い張る。自分たち  
のテロ活動に支障が生じていたのだ。)により、あっけなく撃ち落とされた。『エレクトリック  
アイ』に投資された6兆円の税金が無駄になったそうな。渦中の『エコテロリスト』団体はも  
はや宗教団体と化しており、手術で顔をコロコロ変えるし、一部のハリウッド俳優や日本の芸能人  
などをスポンサーにつけたりで、ますますタチが悪かった。

この頃になると映画俳優などの『整形疑惑』なんて話題があがることは無くなると思われたが、彼らだけは『別』のようで、週刊誌に『整形前、整形後』の写真を掲載され、『整形、変身』を繰り返している人々の間で『言われたい放題』言われていた。まさに『お前らに言われたくないわ!』状態であった。ちなみに、その写真のほとんどは『良くできたフェイク』であり、有名人側が出版社を相手に訴訟を起こすことがしばしばあった。

しかし、その流れの一方で、ごく少数ではあったが、いっさいの美容整形を拒否する人々もいることはいた。『少数派』であるがゆえに『大勢という超人』、つまり『多数派』からは『空気が読めない』だの『協調性が無い』だの『信用できない』だのと『言われたい放題』であったが、『少数派』は『少数派』なりにネットを通じて、被害者感情を共有することで、その結束を強めていった。まさに『ルサンチマン(\*哲学者ニーチェの著作にしばしば登場するニーチェ哲学用語、もとはフランス語、日本語では怨恨感情と訳されることが多い)』が『超人』になろうとしていた。ついでに、その著作『リヴァイアサン』で有名な政治哲学者トマス・ホッブス(1588-1679)の愛好家が当時の日本における『整形族がその一体感により得る他に対する支配欲、そして大勢ゆえの絶対主権の正当性』について論じた作品をケータイ出版し、国外からは『リヴァイヴァルじゃん』と皮肉られた。同時に『整形族』という言葉が定着して、『seikeizoku』が外国でも通用する言葉になり、整形文化とその技術が外国の一般人にも浸透し始めた。

2xxx年。他人の体内に埋め込まれたICチップの情報を読み取る装置はますます小型になり、人体に埋め込み、脳と連結する事が可能になった。つまり、言葉を介さずに見た瞬間に、その相手の情報を知る事ができるようになった。便利ではあったが、もうほとんど『美容整形』を通り越して『改造手術』であった。シロッカー(\*悪の秘密結社)も真っ青だ。

そんな状況はすぐに他の国々にも波及していった。ちなみに、この頃になると日本語は『英語とフランス語とイタリア語を足して円周率で割ったような』言語に姿を変えていた。漢字で表記される単語はほとんど無くなり、アルファベットやカタカナで表記される単語ばかりであった。日本語という言語までもが国際化の名の下に、『欧米に溶け込める』ようにその表面だけが整形された形であった。で、むしろ在日外国人の方が『古い日本語、古い日本文化』に詳しくかった。さらに携帯電話などのメールによる意思の疎通がますますその頻度を増し、人間が自分の口から言葉を発する機会はますます減っていった。最終的にはその携帯電話も脳に埋め込まれることになる。これにより『自動車の運転中の携帯電話使用』に対する取り締まりは事実上不可能になり、交通事故が多発した。\*未だに自動車は宙に浮いていません。

若者を中心に『大きく、パッチリ』とした『瞳』に対する願望はやがて『競争心』に代わり、人類の瞳はだんだん『手術』により大きくなっていった。日本のアニメキャラにますます近づいていたといっても過言ではない。

この頃になると、年齢も外見だけではまったく判断ができなくなっていた。

さらに、自分の子供の成績を少しでも上げようと子供の脳に『わけのわからん小型機械』を埋め込む手術を受けさせる親も少しずつ増え、競争になり、やがてそれが当たり前になった。しかし、その脳をいじくる手術が『未だ未開発』の脳細胞を刺激して人類の『脳の肥大化』が少しずつ進行していた。つまり頭部が大きくなっていった。アゴの退化もそれに拍車をかけ、ますます相対的に頭部が大きくなっていった。そして、『一部の変わり者』を除き、誰もそれを不思議に思わなかった。大きな瞳に小さなアゴ。まさに『輪郭だけ』ならアニメのキャラクターであった。

2xxx年。再び訪れた世界規模の深刻な食料危機により、安価で栄養価の高い『栄養補助剤』が『主食』になってゆき、それはアゴの退化を促進した。健康を維持することは容易であったが、人類の体の小型化がゆっくりと進行した。ちなみに、この頃の日本では農林水産業に携わる人間はほとんどおらず、『猫型ロボット』に『お任せ』であった。スポーツはもはやネット上の架空世界で行われることが主流になった。しかし、総合格闘技だけは現実の世界で行われており、『手術により漫画みたいな筋肉』を持った人間や、『猫型ロボット(格闘用・非売品)』が死闘を繰り返していた。ラウンドガールは『アイアンメイデン』と名付けられた『女性サイボーグ』であった。で、さらに就職に有利ということで、パソコン操作をよりスムーズにする目的で手の指を『より細く、長く』する手術も奨励されるようになった。それは楽器を演奏する際にも有利とされた。なんだかんだで『オゾン層』はますます薄くなり、大量に降り注ぐ有害な紫外線に対抗するために、『ノーマルスーツ』と呼ばれる、頭部からつま先まで、全身を包む特殊な光沢のある灰色の衣服が開発され、やがてそれが当たり前になった。その『全身防護服』の目の部分にはサングラスの様な加工が施された。

そのメイド・イン・ジャパンの『ノーマルスーツ』は放射能を跳ね返し、さらに『しつこい油汚れ』もサッと落ちる『スグレもの』であった。やがてそれが世界基準になった。某国製の模倣品の摘発が後を絶たなかった。しかし、見分け方は簡単。あからさまに『日本製』とプリントされているのが偽物であり、本物は紫外線ライトで照らすと『私はウルトラマンではありません』の文字が背中に浮かび上がる仕組みになっていた。さらに『飛び出す3Dメガネ』で見ると、男女ともに『ナイスボディ』に見えるトリックもあった。

整形族は『ノーマルスーツ』を着込んでいると、実際、見ただけでは『誰が誰だか』分かんなかったが、脳に埋め込まれた通信機器により問題は特になかった。その一方で『アンチ整形』派の人々は紫外線の届かない地下深くで、重力によるエネルギーを反発力に代える研究を重ね、さらに『反物質』を利用した『反則に近い』高性能エンジンを開発し、りっぱな宇宙船の開発を進めていた。

荒廃した地球環境をよそに『京都議定書』は完全に過去の人間の理想論になり、U国とC国が責任のなすり付け合いをしていた。日本はその二国が『最終的にどっちが勝つか』黙って見ていた。A国はようやく『増えすぎたクジラ』は漁場を荒らす脅威になることに気付いたが、既に遅かった。誰も商業捕鯨再開に興味を示さなかった。例の漁業用『猫型ロボット』も「それはもう無理だよ。」と言うばかり。（\*降り注ぐ大量の紫外線の中でも海洋生物はなんとか生き延びていた。）『エコテロリスト』達は太平洋に浮かぶ無人島に移り住み、自分たちの理想郷を目指したが、『自然の厳しさ』と『自然の気まぐれ』と『人間の業の深さ』を思い知り、同時に『ワケのわからん伝染病』にかかり全滅した。近代文明を捨てた彼らは伝染病に対して『なす術無し』であった。

30xx年。そんなこんなで、地球に嫌気の刺した『整形手術』もしくは『改造手術』比定派の人々は『こと座のα星』、VEGA（ヴェガ）を中心とする惑星系への脱出を開始していた。やがて彼らは地球からは完全に独立し、そこに新しい彼らの理想郷を築き上げた。しかし、まもなく惑星全土を襲う『大洪水』が起こり、文明のほとんどが失われ、残されたわずかな数の人類で一から築き上げることになった。荒廃した地球に残った『整形族』は、なんだかうらやましかったので、たまにVEGA系の惑星へ、宇宙船に乗って偵察に行くようになり、やがてそれが彼らの『流行』になった。

ちなみに、そのころには『ノーマルスーツ』を着込んだ状態の『整形族の地球人』の姿はこんな風になっていた。

——で、“整形族”の姿は  
こんなになっていた。

